

常照

第842号

お墓—人間としての

存在の原点

お墓とは、お骨を納める場所、納骨する場所です。他の動物と人間との違いは、お墓を設けた点にあることです。どんなに知能が高い動物であつても、親・つがい・子どもが亡くなつても、その遺体はそこに放置されたままでした。人間だけが埋葬したのです。しかし、ただ埋葬しただけではありません。そのお墓の前で礼拝したのです。お墓は祈る場所、頭を下げる場所という意味をもつたのです。人類の祖先は、身内や親し

い人を亡くした時、悼（いた）み悲しむという感情をもつたのです。それは他の動物にはない感情です。人間だからこそ、悼み悲しみながら、亡くなつた人の遺体やお骨に向き合ひ礼拝してきたのです。ここにお墓の「はじめ」があり、人間としての存在の原点があります。

私たちに、環境・風土・民族・習俗等のさまざまの違いがあります。死の受け止め方や、死者との向き合い方にも違いがあります。死霊を追ひ払う、死んだ後に魂が天に昇華する等、それぞれ宗教的な信仰に基づいての死生観、死者儀礼があり、お墓の様式にもさまざま違いがあります。しかし、違いがあつたとしても、死者を前に悲しみ悼むという感情が生じ、頭が下がり、礼拝するとう同じ行動をとつてきたのです。それが人間としての私たちのはじめなのでしよう。

考古学の分野では、人類の最古のお墓は旧石器時代のもつと言われて

います。何万年もの長い時の中で、喪失の悲しみ悼みという感情を形にしてきたのがお墓なのです。だからお墓は納骨・埋葬という場所というだけではなく、死を悲しみ悼み、頭を下げ礼拝してきた人間の精神の営みの象徴なのです。

変化する相続の形

現在、少子高齢化等さまざまな事情のなかで、お墓を相続することの難しさを抱えていらつしやる人たちがたくさんおられます。現代のお墓の事情は物凄いスピードで変わってきています。「終活」という言葉が流行り始めたと同時に、寺院墓地、自治体や一般企業の運営する霊園でも、お墓の整理、つまり「墓じまい」が、かつてないほど多く行われているようです。さまざまな事情の中で、その家や一族の墓を整理し、お骨を納骨堂・合葬墓等に移す人たちがおられます。これも大切なお墓の相続の形

です。

一方、お墓を相続する後継者がいるにも関わらず、子どもたちの迷惑になるからと、本来墓じまいする必要のない人たちが墓じまいをする現実もあります。断捨離の一環なのでしようか？ 迷惑をかけるからと言って次の世代との関係を断ち切ってしまうことになるのではないか。それはまるで先祖の存在がなかったように、その存在を消す、棄(す)てるような感じもします。それがある方は「先祖殺しが始まった」とおっしゃっていました。いろいろと事情があるのだと思えますが、棄ててはならないものも棄ててしまっているような気がいたします。



誰のための墓なのか

墓じまいをして、その後のことは子どもが自由にしてくれたらいい、親は親、子は子ということでしょう。それで子どもが困るといふ事例もあります。

実際、お墓も納骨堂も返還しようと考えたご両親が子どもに相談をしたところ、「父さん、母さんのお骨はどこに持っていったらいいんだ」と問われ、自分の入る場所、自分の最期を考えていなかったと慌てて考え直した方もいらっしゃいました。笑い話かもしれませんが、お骨、遺骨が「モノ」扱いになっていて、そんな寂しさや悲しさも垣間見えます。人間のつながりが家族間でさえ、希薄になっていくことが窺（うかが）えます。死を縁に生まれてきたことの意味をたずねていく、同時に未来に生きる人たちに、いのちの尊さを相続していく、本当の終活はこうい

う意味を持っているのではないでしょう。か。

お墓は悲しみ悼む場所であるとともに、感謝する場所でもあります。先祖から言葉に言い表せない大事なものの受け取った私たちが、お墓も仏壇もない、手を合わせる場所も手を合わせる意味もわからない、そんな未来を子孫に残していこうとしているのです。一人の判断で勝手にやっても大丈夫ですか？

墓石に刻むは

縁ある者がこのお墓に一緒に納まって、いのちの尊さを次の世代にも、またその次の世代にも相続されていくようにという思いをこめて。墓石には仏説阿弥陀経の一節「俱会一処（くえいつしよ）」という言葉が刻まれます。お骨は生きていた証。お墓に入るけど、私たちはみんな阿弥陀さまのもとに生まれていくんだよ。という故人からのメッセージです。

あとには、南無阿弥陀仏の六字も浄土真宗の墓石に刻まれていきます。俱会一処と同じように「墓に入る人生ではないんだよ、阿弥陀という仏さまが看取ってください、仏として生まれ変わっていく幸せな人生なんだよ」という温かい言葉です。私たちは死者と向き合いながら思いに触れ、仏教の教えに触れ、人が生まれ生きて死んでいった存在の尊さを知らされていくのです。そこに手を合わせるといふ姿があるのです。

海洋散骨や樹木葬、海や野山に撒くという選択肢ももちろんあります。お墓がすべてだと説教するつもりはありませんが、人間としてのいのちを両親・遠くは祖先からいただいた私達は、何を次の世代に相続するのかという問いをもっとほしいのです。お墓も仏壇もない、手を合わせる場所も手を合わせる意味もわからない、そんな未来を作るのは誰なのか。

三月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 三月七日(木)～十一日(月)

宮崎教区高千穂組 正念寺 講師 吉村 礼心 師

○後期 三月十三日(水)～十六日(土)

奈良教区宇陀北組 萬行寺 講師 沓名 奈都子

○春季彼岸会布教

三月十八日(月)～二十日(水)

北海道教区十勝組 妙法寺 講師 石田 智秀 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～

午後三時半

◎浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院ください。席の間隔を保ち、換気実施の上、お待ちしております。

尚、三月二十日(水)は春季彼岸会の御中日のため月忌参詣はお休みさせて頂きます。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (〇三三四) 二二一〇七四四番
FAX (〇三三四) 二九一四〇八〇番
テレホン法話 二七一六六一六番